

亀五郎がその工事をうけおつたのは、明治二十年二月のことで、四十四才の働き盛りのころでした。何しろ、現在のような機械もなく、ノミとつちで石を打ちくたく作業なので、ひと打ちしても、ほんの少しきずがつくくらいに進み方で、五、六人の石工が一日働いても、ごくわずかしかほることができませんでした。それでも、朝早くから夕方おそくまで働きつづけました。

四月もなかばころになると、農家の仕事もいそがしくなり、村から出ていた人夫も、一人へり二人へりして、少なくなり、作業も進まなくなりました。

亀五郎は、石工の工夫を集めるために、苦勞を重ねる日がつづきました。村人たちも、ときおり工事の進み方を見に来ては、あまり進まない仕事ぶりに、これでは完成は無理かなど、心配顔でした。

農作業がひまになると、村からの人夫も出るようになり、作業もいちだんと活気を増してきました。

冬の期間は、雪まじりの冷たい風が吹きこみ、鉄のノミを持つ手が、ピタリと